

くらしをくらべる 戦前・戦中・戦後

衣食住の うつりかわり

1

古舘 明廣 著



はじめに

この3巻のシリーズは、戦前と戦中と戦後で、わたしたちのくらしがどう変化したのかを考える本です。戦前、戦中、戦後は第2次世界大戦のことで、アジア・太平洋戦争ともいいます。

第1巻では戦前から戦後にわたる衣食住の変化をみていきます。

日本の近代化は明治時代からはじまったといわれます。その前後に明治維新といわれるさまざまな出来事がありました。黒船来航で開国し、戊辰戦争という政権をめぐる国内の戦争があり、徳川幕府がたおされ、明治新政府が誕生します。明治新政府は富国強兵ををかけて列強とよばれる欧米の仲間入りをめざします。

しかし、明治の近代化がすすめられたのは、大都市などで、地方の小さな町や村では、まだまだ江戸時代のままのくらしがつづいていました。その確たる証拠が江戸時代の家屋やくらしの道具などがのこっていたということです。江戸時代のくらしが明治以降もつづいていることを物語っています。

明治の近代化は欧米に追いつくことが最大の目標です。それを実現するために日本は拡大主義をとります。かんたんにいうと、領土の拡張です。よその国に日本が領土を広げるのですから、紛争になるのは当たり前です。

そのため日本の近代国家としての歩みをみると、およそ10年ごとに大きな戦争をくりかえしてきました。最初の大きな戦争は中国との日清戦争で、1894年のことです。その後1904年の日露戦争、1914年の第1次世界大戦、1931年の満州事変、そして第2次世界大戦が1941年にはじまり1945年までつづきました。戦争で、日本は植民地をもつ国にもなっています。

現在の平和な日本を考えると、じつにおどろくべき戦争回数です。その戦争のたびに、尊いいのちがうばわれ、自然が破壊され、人びとの生活は苦しみをうけました。子どもたちは勉強もできない、遊ぶこともできないといったこともおきました。

第1巻では戦前・戦中・戦後の衣食住について、なにがどう変わったのか、なぜ変わったのか、その変化と理由を考え、なにを学ぶべきかをいっしょに考えてゆきたいと思います。

1 もくじ

くらしをくらべる 戦前・戦中・戦後 衣食住のうつりかわり



はじめに 2

どんな時代 どんなくらし

足りない衣食住から「モッタイナイ」へ 4

衣



和服から洋服へ 6

女性の装い 8

男性の装い 10

はたらく人の服装 12

子どもの服装 14

流行とおしゃれ 16

食



膳からちゃぶ台へ 18

食べものがない時代 20

家庭の食事 22

洋服 24

おやつと戦争孤児 26

外食 28

学校給食 30

コラム 学童疎開 32

住



いろいろな時代の家 34

夏と冬 家のしつらえ 36

漁村の家 38

農村の家 40

灯り 42

トイレ 44

井戸と水道 46

風呂 48

電化製品の登場 50

衣食住をささえているもの 52

さくいん 54



子どもの服装

はだし 裸足で服をもっていない子どもたち

戦前



大正時代の尋常小学校の男組。男組は紺の着物で授業をうけている。左の写真では、国民服(P10参照)のようなものにスポンをはき、足もとは下駄や

草履履きで足袋をはいている。中央の先生は洋装。この時代は、男女別々にクラスわけすることが多かった。(写真/西東京市図書館)



大正時代の尋常小学校女組。左の写真は記念写真のようで、セーラー服を着た子、シャツを着た子、もんぺのような服を着た子など、さまざまな服装が

みられるが、ほとんどの女子が足袋をはき、履物は草履をはいている。(写真/西東京市図書館)

戦前 東北地方の農村を歩いた、下村千秋という作家の記録があります。記録のタイトルは、「飢餓地帯を歩く——東北農村惨状報告書」です。

その記録のなかに「御堂村(現岩手町)では、雪が降っているというのに、子どもたちはシャツも着ていず、足袋もはいていない。女の子は脛だけをくるんだ赤い布の股引をはいているだけであった。食べものもシダミと称する樺の実をふかして食い、わらびの根を澱粉として腹をみたしているだけだ。全村の小学児童900名のうち400名が欠食児童であった」(『中央公

論』1932年2月号)と記しています。ちなみに1933、1934(昭和8、9)年には、全国の欠食児童は9000人にも達する悲惨な状況でした。

2月号ですから、前年の晩秋ころに訪ねたのでしょうか。11月の盛岡は5度台、1月ですとマイナス2度台が平均気温です。山間部ではもっと寒くなります。同じ国民でも、きびしい寒さのなかで、シャツも着れず、靴下もはいていない子どもたちがいたのです。こういう悲惨な国民生活をかえりみず、大戦へとすすんでいった日本は、貧しい人びとに目を向けることがなかったのです。

子どもたちの服は、夏は浴衣が多かったようです。冬は子ども用の「どてら」などを着て寒さをしのいでいました。どてらとは、ふつうの着物をやや大きく仕立てて、綿を入れたものです。衣服の上から防寒用に着ます。

とくに気温の下がる山間部では、寝るときは

丹前などを寝巻にして寝るなど、地域によってさまざまに寒さをしのぐ工夫がありました。丹前とどてらをおなじとする地域もあれば、丹前はおもに寝巻として、どてらと区別して着ている地域もあります。



写真は太正時代ころのもので、木綿の着物に細い帯をしめ、男子はふだん裸足ですごした。(写真/台東区立下町風俗資料館)

戦時中は服も食べものもなかった

戦中

アジア・太平洋戦争のはじまる1941(昭和16)年4月、それまでの小学校が国民学校と改められました。初等科6年、高等科2年で、合計8年間で義務教育の期間とされました。将来の日本を背負う子どもたちを大事に教育するようですが、実際は、戦時教育「皇国民の育成」を重点にしたものでした。

「欲しがりません勝つまでは」と誓わされ、衣類もなく、食べものも少ない衣食の耐乏生活を強いられ、子どもたちはひもじい生活でした。1944(昭和19)年ころからは戦争が過酷になり、都会の小学生の田舎への疎開がはじまりました。



戦時中の子どもたちの服装。衣服の不足と、軍事訓練で動きやすいような服を着ている。(写真/中野区)

食 学校給食

戦争で中断した学校給食

学校給食が全国の児童にゆきわたるようになったのは、戦後になってからです。明治時代から一部の学校で給食がありましたが、全国にひろまることはありませんでした。明治政府は、軍勢力などの国力増強に熱心でしたが、子どもの教育現場には関心がうすかったのです。戦時中は食料難で中断し、大都市の学校でわずかなメニューで給食が実施された程度でした。

戦後も食料難はつづきました。そのため給食にまわす食料ありませんでしたが、アメリカの「アジア救援公認団体（略称はララ）」によって、食料だけでなく衣類、医薬品、文房具、せッケンなどの救援物資が送られました。そのおかげで1947（昭和22）年には、シチューと脱脂粉乳だけでしたが、学校給食がはじまりました。



ララの救援物資。この食料援助によって学校給食（副食のみ）がはじまった。ついで衣類が多く、東京都には古着約65万点、靴8万足が支給された。（写真／毎日新聞社）

現在のように給食が全国の学校に行きわたったのは1950（昭和25）年からで、貧しくて弁当をもってこれない子どもたちにも、パンとミルクの給食がはじまりました。



1955（昭和30）年ごろの小学校の給食のようす。献立はコッペパン、脱脂粉乳、それにおかずがひとつだが、貧しい家庭の子どもも多く、給食はありがたいものだった。（写真／酒田市立資料館）

米がないのでパンが給食に

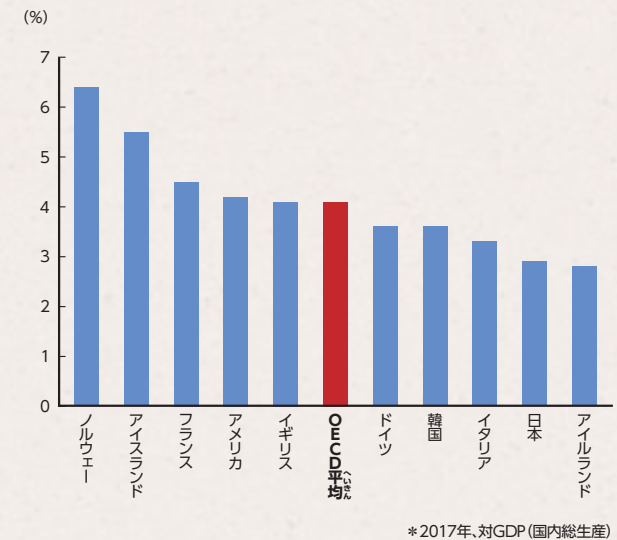
給食のメニューをみてみましょう。1952（昭和27）年からは、コッペパンとジャムがそえられ、おかずにクジラの料理とキャベツ、脱脂粉乳のメニューになります。1965（昭和40）年ころからは、現在の給食に近いメニューで、脱脂粉乳に代わって牛乳が飲めるようになりました。昭和50年代（1975～1984年）には、栄養のかたよりがないように、和食の給食が登場するようになります。お米の給食ができるようになった背景は、米の生産量もふえ、そして安定してきたからでした。

戦後の給食が米ではなくパンだったのは、米がないという食料難が原因でした。そこで援助物資である小麦でつくるパンが給食に出たのです。コッペパンは給食だけでなく、国民全体で食したパンで、さまざまな食材をはさんで食べることができて人気でした。

現在はすべての児童が給食を食べることができますが、問題もあります。とくに給食費が家庭の負担になっていることです。一部の自治体

教育への公的支出が低い日本

日本は比較可能な38か国のうち、アイルランドについて二番目に低い支出。下のグラフはおもなOECD（経済協力開発機構）加盟国の教育機関への公的支出割合を示しています。



戦後

で無償化を実現している程度です。給食を税収でまかなうことはかんたんなことではありませんが、日本はもちろん、世界の未来をになう子どもたちに対して、公のお金をつかうことは検討されるべきです。OECDの調査では、日本は教育への公的支出が平均を大きく下回っているのが現状です。



こんにちの学校給食。栄養だけでなく地場産物をいかした献立が考えられている。（写真／全国学校給食甲子園事務局）

DDTの散布

戦後は食料がなかっただけでなく、不衛生な生活環境でした。頭にシラミのいる子どもが多く、感染症も流行しました。シラミの駆除は、DDTという薬剤を頭に散布しておこなうのですが、こうしたDDT散布によるシラミの駆除は、昭和30年代（1955～1964年）までおこなわれました。



頭にDDTを散布される子どもたち。（写真／朝日新聞社）